

小楠公の母を詠ず (本宮二香)

南朝の 烈婦 姓は 楠木

許さず 我子の 茲に 腹を 屠るを

櫻井の 遺訓 汝 忘れ たるか

刀を 奪い 死を 諫めて 涙 目に 溢る

正行 感激して 誠忠を 誓う

血戦 幾たびか 奏す 竹帛の 功

君 見ずや 斯母 在りて 斯子在り

忠孝 両つながら 全きは 小楠公

南朝烈婦姓楠木 不許我子茲屠腹

櫻井遺訓汝爲忘 奪刀諫死淚溢目

正行感激誓誠忠 血戦幾奏竹帛功

君不見斯母在斯子在 忠孝両全小楠公

解説 父、楠正成くすのきまさしげに従い出陣するも、年少のために家に帰され、自刃せんとするも、母に諫められる。後年、歴史に残る働きをすることを述べた詩。

語釈 ※小楠公くすのきまほこう 南北朝時代の武将、楠正行の敬称。父、楠正成くすのきまさしげの大楠公に對していう。※南朝 摂津国の住吉(大阪市住吉区)を本拠とした大覚寺統の後醍醐天皇に属する朝廷。※烈婦まほつち 烈女。正行の母。※屠腹 腹を切ること。切腹。※櫻井遺訓 西国街道の桜井駅で、楠木正成・正行父子が訣別する逸話で、正成は「お前を帰すのは、自分が討死にしたあとのことを考えてのことだ。帝のために、お前は身命を惜しみ、忠義の心を失わず、一族郎党一人でも生き残るようにして、いつの日か必ず朝敵を滅せ」と諭した。※諫 その過ちや悪い点を指摘し、改めるように忠告する。※誠忠 まごころから出た忠義。誠心。※血戦 血まみれになって激しく戦うこと。死を賭して戦うこと。※竹帛 書物、特に、歴史書。※功 働きによつて成功をおさめたそのてがら。※忠孝 子としての義務を尽くすこと

通釈 南朝時代の烈婦、正行の母は父から家に帰されたことを遺憾に思い、自刃せんとするも、母に父からの櫻井の遺訓を忘れたのかと、正行から刀を奪い、正行の過ちを指摘した。正行は感激して再び誠忠を誓い、成人後に戦いに向かい竹帛の功を遂げた。この母ありてこの子有り。忠孝するは正に小楠公である。